ショートステイ利用家族の実態と力動

高　橋　博　子*

はじめに
Ⅰ　ショートステイ利用老人と介護者の背景
　1　ショートステイ利用老人と介護者の性別と年齢階層
　2　ショートステイ利用老人と介護者の続柄
　3　ショートステイ利用家族における老人と介護者の同居過程と同居年数
　4　ショートステイ利用介護者の介護意欲
Ⅱ　ショートステイを利用する前の状況，利用に到るまでの過程
　1　ショートステイを何で知ったか
　2　ショートステイの利用を積極的にすすめた人は誰か
　3　ショートステイの利用に対する別居家族の反対があったか
　4　ショートステイ利用前，老人はどのように受けとめていたか
　5　ショートスティの利用経験
　6　ショートステイ利用前，老人はその施設をどの程度知っていたか
　7　ショートステイの利用理由
おわりに

＊日本赤十字武蔵野女子短期大学非常勤講師

はじめに

高齢化社会が急速に進行するなかにあって，もはや，施設ケアのみでも家族ケアのみでも，要介護老人の誇りある終末は守られ難い見通しである時，ショートステイ・サービスは，在宅介護を社会サービスが援助するものとして，今後の社会福祉の在宅ケア戦略の重要課題としての役割を担っている。しかし施策が単なる量的な供給整備のみに終ることなく，その利用が遍在することのないような配慮が重要である。真にサービスを必要としている対象が見落とされることなく，老人と介護者の家族力動を把握した上でショートステイ施策の拡充がはかられるべきである。そして，利用したいと思う介護者が迷うことなく利用し，さらに，当該老人自身も喜んで利用する効果のあるショートステイ制度でなければならない。そのためには如何なる条件が必要か。

本稿は，「ショートステイ・サービスに関する調査」（53頁参照）をもとに，経験的見地も加えながらショートステイを利用した家族について，家族形態及び老人と介護者の二者関係をまず考察し，さらに，介護代替援助を含めた親族ネットワークに焦点をあて，如何なる老人と介護者の関係のとき，社会サービスを利用しつつ在宅介護を続けようとする意欲を持っているのか，その力動と要因の分析を行う。

I　ショートステイ利用老人と介護者の背景

1　ショートスティ利用老人と介護者の性別と年齢階層

ショートステイサービスを利用した対象老人139人の性別は，男性50名37%，女性86名63%（無回答３名）であった。それに対し，介護者の性別は男性18名13%，女性121名87%である。介護されている老人も女性が多いが，介護者は圧倒的に女性が多い。

表１は，ショートステイ利用老人についての年齢階層別の性比である。64歳以下から95歳以上にわたる広い年齢巾の中で，80歳以上の高年齢層においては男性老人の相対的比率が全体の性比割合よりも高く，60代70代層では女性老人の相対的比率が高い。介護対象が男性である場合の方が，超高齢になるまで介護者がショートステイを利用せず在宅介護を頑張っていることをうかがわせる。それに対し，女性老人は60代70代からショートステイに預けられる比率が高い。いいかえれば，女性老人を介護している介護者がより早く社会サービスを利用してる傾向が見いだされた。

男子老人は妻の介護をうける確率が高く，老妻は超高齢になるまで，ショートステイを利用することは少ないことが考察された。他方，女性老人は早く無配偶となる運命にあり，嫁や娘から介護をうける世代間介護関係が多く，中年女性は他の家族役割も多く，社会サービスに対する認識も早いので，その利用における老人の年齢階層上の分布の差異があらわれたものと考えられる。

表2は，介護者についての性別と年齢階層の分布を示している。男性介護者は全体の13%18人に過ぎないが，その18人の年齢層分布では，70代以上が半数を占め，高齢の夫が妻を介護している関係が見出された。それに対し介護者全体の87%（121人）を占める女性介護者の年齢層は20代から80代に広く分布している。女性介護者の33%が60歳以上層である。老人介護の中心は，40代，50代の中年女性である嫁による世代間介護という一般的イメージが強いが，40代50代の女性介護者は約半数(52%)にしか過ぎず，孫世代に当る20代30代の若い介護者も女性介護者の11%を占めている。

ショートステイを利用していないケースも含めた介護者の性別年齢別割合との対比の上で考察すべき問題ではあるが，この調査で見る限り，ショートステイを利用する割合の高いのは，男性介護者の70代と，40代50代の女性介護者である。高齢の女性介護者はショートステイ利用に至る比率が比較的少ないように考えられる。決して高齢女性介護者がショートステイ利用のニードが低いわけでなく潜在していることに注意が必要である。

表3は，ショートステイ利用老人の性別と介護者の性別のクロス集計である。男性老人を介護するものの92%は女性であり，女性老人はその15%が男性に介護されている。我国

表1　ショートステイ利用老人の年齢階層別老人の性別

		老人の性別		
		男性	女性	計
老人の年齢階層	64歳以下	2 (33.3)	4 (66.7)	6 (100.0)
	65～69歳	2 (28.6)	5 (71.4)	7 (100.0)
	70～74歳	6 (33.3)	12 (66.7)	18 (100.0)
	75～79歳	9 (32.1)	19 (67.9)	28 (100.0)
	80～84歳	12 (40.0)	18 (60.0)	30 (100.0)
	85～89歳	10 (37.0)	17 (63.0)	27 (100.0)
	90～94歳	8 (42.1)	11 (57.9)	19 (100.0)
	95歳以上	1 (100.0)	—	1 (100.0)
	計	50 (36.8)	86 (63.2)	136 (100.0)

表2　ショートステイ利用介護者の性別年齢階層

		介護者の年齢階層							
		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80歳以上	計
介護者の性	男子介護者	—	—	1 (5.6)	4 (22.2)	4 (22.2)	7 (38.9)	2 (11.1)	18 (100.0)
	女子介護者	3 (2.5)	10 (8.3)	28 (23.1)	40 (33.1)	22 (18.2)	15 (12.4)	3 (2.5)	121 (100.0)
	計	3 (2.2)	10 (7.2)	29 (20.9)	44 (31.7)	26 (18.7)	22 (15.8)	5 (3.6)	139 (100.0)

の高齢化は，まだ75歳以上老人の総人口比が4％台である序盤戦の段階にある中で，ショートステイ利用介護者の中に，既に女性を介護する男性が15％出現し，しかも高齢であるということは注目を要する。

表4は，介護される老人の年齢と介護するものの年齢のクロス集計である。ショートステイ利用老人の過半数78人(56％)が80歳以上の超高齢者であり，そのうち介護者が60歳以上の老人であるものは30人にのぼっている。つまり80歳以上のショートステイ利用老人の38％は高齢者に介護されており，老人が老人を介護している実態が明かとなった。60歳以上の高齢介護者53人に限れば，その57％が80歳以上の超高齢者老人を介護しているわけである。介護者自身が既に老年期を迎え，老人介護が共倒れの危険の高い高齢者間介護に傾斜している現実が出現しているのである。

表3　ショートステイ利用老人の性別と介護者の性別

		介護者の性別		
		男性	女性	計
老人の性別	男性	4 (8.0)	46 (92.0)	50 (100.0)
	女性	13 (15.1)	73 (84.9)	86 (100.0)
	計	17 (12.5)	119 (87.5)	136 (100.0)

2　ショートステイ利用老人と介護者の続柄

次に，**表5**は介護者の男女別に老人の続柄をクロス集計したものである。実父を介護する10名のうち，娘による介護が7名，息子によるものが3名である。実母を介護するもの32名のうち息子は4名，娘は28名である。配偶者の父または母を介護するものは，すべて嫁であり，婿が介護者と回答しているものはいない。さらに，女性介護者では，夫の母を介護するいわゆる嫁姑関係が最も多く121名中40名(33％)を占めている。次いで娘が実母を，3位は妻が夫を，4位は嫁が夫の父を，

表4　介護者の年齢階層別老人の年齢階層

		老人の年齢階層								
		64歳以下	65～69	70～74	75～79	80～84	85～89	90～94	95歳以上	計
介護者の年齢階層	20代	1 (33.3)	—	—	—	2 (66.7)	—	—	—	3 (100.0)
	30代		3 (30.0)	2 (20.0)	2 (20.0)	2 (20.0)	1 (10.0)	—	—	10 (100.0)
	40代	1 (3.4)	—	8 (27.6)	11 (37.9)	5 (17.2)	3 (10.3)	1 (3.4)	—	29 (100.0)
	50代	1 (2.3)	—	1 (2.3)	8 (18.2)	11 (25.0)	13 (29.5)	10 (22.7)	—	44 (100.0)
	60代	2 (7.7)	2 (7.7)	3 (11.5)	4 (15.4)	2 (7.7)	7 (26.9)	5 (19.2)	1 (3.8)	26 (100.0)
	70代	1 (4.5)	2 (9.1)	4 (18.2)	4 (18.2)	6 (27.3)	2 (9.1)	3 (13.6)	—	22 (100.0)
	80歳以上		—	—	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)	—	—	5 (100.0)
	計	6 (4.3)	7 (5.0)	18 (12.9)	30 (21.6)	31 (22.3)	27 (19.4)	19 (13.7)	1 (0.7)	139 (100.0)

表5　介護者の性別老人の続柄

		介護者からみた老人の続柄								
		夫	妻	実父	実母	配偶者の父	配偶者の母	きょうだい	その他	計
介護者の性	男性介護者	—	9 (50.0)	3 (16.7)	4 (22.2)	—	—	—	2 (11.1)	18 (100.0)
	女性介護者	25 (20.7)	—	7 (5.8)	28 (23.1)	13 (10.7)	40 (33.1)	2 (1.7)	6 (5.0)	121 (100.0)
	計	25 (18.0)	9 (6.5)	10 (7.2)	32 (23.0)	13 (9.4)	40 (28.8)	2 (1.4)	8 (5.8)	139 (100.0)

5位は娘が実父を看るケースである。男性介護者18名のうち，夫が妻を介護する関係が9ケース，息子が実母を介護する4ケース，実父の3ケース他である。

親族関係としてまとめてみると，嫁が，夫の父または母を介護している関係が38%(53ケース）娘が実親を介護する関係が25%(35ケース)，夫婦間介護が25%（34ケース)，息子が実親を介護している5%（7ケース)，傍系親族間の介護が1%（2ケース)，その他の親族関係6%（8ケース）となっている。

ここでは注目されることは，娘が実父母を介護する関係の比率の相対的高さである。一般に老親と子の同居世帯は，戦前の家制度の伝統をひいて，まだ，我国では息子との同居が9割近くを占め，娘との同居が11%にすぎないのに対し，ショートステイ利用者を対象とするこの調査では，娘による実父母の介護が25%に昇っており，嫁による介護は38%である。三世代同居の大半が息子との同居であり，嫁による介護が多くを占めていることを考えると，ショートステイ利用者の場合，三世代同居の嫁による介護関係の相対的比率は低いと言わざるを得ない。娘と実親関係という続柄の場合は，他の親族間の規制も少なく，ニードが利用につながっているものと考えられる。しかし嫁が介護する場合は同程度のニードがあっても，老人本人の意志や周囲の親族関係の意見により利用を決定する家族力動が，社会サービス利用の阻止要因として働いている事が考えられる。

表6は介護者と老人の続柄別に介護者の年齢をクロスした表である。

夫が妻を介護している9ケースのうち，60代の1人を除く8ケースすべてが70代以上の夫である。また，妻が夫を介護している25ケースのうち，50代の1人を除き24ケースすべて60代以上の妻である。夫及び妻共に70代の介護者が多い。また，娘が実母を介護する場合も18%が60代以上の娘であり，きょうだい間の介護も2ケースともに，60代70代の老齢者介護となっている。いずれも老人が老人を介護しているケースが多い。

次に，介護者の続柄と家族形態の関係をクロスすると**表7**の結果となる。ここで注目すべきは，老妻が夫をみている25ケースのうち，老夫婦のみの家族形態のものは半数にすぎず，未婚子のみと同居が5ケース，さらには既婚子の家族と同居が7ケース存在していることである。この7ケースは，三世代家族の中に

表6　介護者と老人の続柄別介護者の年齢階層

	介護者→老人	介護者の年齢階層							
		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80以上	計
介護者と老人の続柄	夫→妻	—	—	—	—	1 (11.1)	6 (66.7)	2 (22.2)	9 (100.0)
	息子→父	—	—	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	—	—	3 (100.0)
	息子→母	—	—	—	3 (75.0)	1 (25.0)	—	—	4 (100.0)
	妻→夫	—	—	—	1 (4.0)	8 (32.0)	13 (52.0)	3 (12.0)	25 (100.0)
	娘→父	—	1 (14.3)	4 (57.1)	1 (14.3)	1 (14.3)	—	—	7 (100.0)
	娘→母	2 (7.1)	2 (7.1)	9 (32.1)	10 (35.7)	4 (14.3)	1 (3.6)	—	28 (100.0)
	嫁→夫の父	—	2 (15.4)	4 (30.8)	7 (53.8)	—	—	—	13 (100.0)
	嫁→夫の母	1 (2.5)	5 (12.5)	9 (22.5)	17 (42.5)	8 (20.0)	—	—	40 (100.0)
	姉↔妹	—	—	—	—	1 (50.0)	1 (50.0)	—	2 (100.0)
	計	3 (2.3)	10 (7.6)	27 (20.6)	40 (30.5)	25 (19.1)	21 (16.0)	5 (3.8)	131 (100.0)

表7　介護者と老人の続柄別家族形態

	介護者→老人	家族形態								
		老人のひとりぐらし	老夫婦のみの家族	老夫婦と未婚子のみの同居	老夫婦と既婚子家族の同居	片親と既婚子家族との同居	片親と未婚子のみの同居	傍系家族（きょうだいを含む）	その他	計
介護者と老人の続柄	夫→妻	—	6 (66.7)	1 (11.1)	2 (22.2)	—	—	—	—	9 (100.0)
	息子→父	—	—	—	1 (33.3)	2 (66.7)	—	—	—	3 (100.0)
	息子→母	1 (25.0)	—	—	—	3 (75.0)	—	—	—	4 (100.0)
	妻→夫	—	13 (52.0)	5 (20.0)	7 (28.0)	—	—	—	—	25 (100.0)
	娘→父	1 (14.3)	—	1 (14.3)	—	3 (42.9)	2 (28.6)	—	—	7 (100.0)
	娘→母	1 (3.6)	—	1 (3.6)	2 (7.1)	17 (60.7)	7 (25.0)	—	—	28 (100.0)
	嫁→夫の父	—	—	—	3 (23.1)	9 (69.2)	—	—	1 7.7	13 (100.0)
	嫁→夫の母	1 (2.5)	2 (5.0)	—	2 (5.0)	34 (85.0)	—	1 2.5	—	40 (100.0)
	姉↔妹	—	—	—	—	—	—	2 (100.0)	—	2 (100.0)
	計	4 (3.1)	21 (16.0)	8 (6.1)	17 (13.0)	68 (51.9)	9 (6.9)	3 (2.3)	1 (0.8)	131 (100.0)

あっても，主として老妻が老夫の介護を担っているケースである。三世代同居家族は老親の身体的介護扶養は子世代の嫁か娘が担っているものとの通念があるが，生活の世代分離の傾向が，介護にもおよんでいることを調査結果は示している。

福祉サービスが，老人のひとりぐらしをまず福祉の対象としている事に対し，更に「老夫婦のみ世帯をも，福祉行政の視野の中にいれるべきである」との論議が最近出て来ている。さらに三世代同居における介護の世代分離の現実を見落とすことなく，これからの福祉は老人個人の介護ニードに応じて，家族形態の如何を問わず供給されるべきであろう。

なお，ひとりぐらしの老人の4人については，別居の息子，娘，嫁が介護しており，夫婦のみ世帯の2世帯についても別居の嫁が介護にかけつけている。老人が病を得たからといって，すぐに子供家族と同居できるとは限らず，要介護になった時，近くの別居親族の応援が，今後重要になってくるであろう。これからの介護分析は，同居以外の近隣に別居する親族ネットワークのサポートの分析も重要である。

では同居の家族以外にも老人を介護するものがどれだけいるであろうか。**表8**は，同居の家族以外の介護の応援者の有無と，応援者と老人との関係をしらべたものである。介護の代替や応援をたのむことが出来ないものが6割にも昇っている。応援者がいる場合，別居の娘が最も多く22%（29名），別居の嫁が12%，有料のヘルパーが9%である。

表9は，介護者と老人の続柄別に介護応援ネットワークを分析したものである。介護応援者のいない介護者は，嫁が夫の親を介護する場合が最も多く，「嫁は老人の世話をするものだ」という社会通念が介護応援ネットワークを弱めていると考えられる。それに対し，娘が実親を介護するケースでは，別居の娘や，別居の嫁，有料のヘルパー，家政婦その他の応援ネットワークをもっている。また夫が老妻を介護している場合も，別居の娘，別居の嫁，有料ヘルパーをはじめとして家政婦，近所の友人と，多くの人々の目がゆき届き介護を支えていることが分析された。しかし息子が実母を介護する4ケースのうち3ケースは介護の代替応援者がおらず，未婚子と老親の介護関係の深刻さを示している。

表8　介護応援者の有無（複数回答）
（同居の家族以外にもおとしよりをお世話する方がいますか。また，それはおとしよりからみてどのような方ですか。）

	回答数	%
いない	79	59.0
別居の娘	29	21.6
別居の嫁	16	11.9
近所の人（ボランティアを含む）	5	3.7
おとしよりや家族の友人	2	1.5
無料のヘルパー	3	2.2
有料のヘルパー	12	9.0
家政婦	5	3.7
その他	12	9.0
計	163	121.6

回答者数　134

世帯員数も在宅介護能力に関係するであろう。**表10**は，世帯員数の単純集計である。2人世帯，即ち，老人と介護者のみの世帯が21%にものぼっている。4人世帯が最も多いが22%である。いわゆる三世代同居に多い5人以上の世帯は33.8%に過ぎず，平均世帯規模

表9　介護者と老人の続柄別介護の応援ネットワーク

	介護者→老人	介護応援者（複数回答）									
		いない	別居の娘	別居の嫁	近所の人	友人	無料のヘルパー	有料のヘルパー	家政婦	その他	回答者数
介護者と老人の続柄	夫→妻	4 (50.0)	3 (37.5)	3 (37.5)	—	1 (12.5)	—	3 (37.5)	2 (25.0)	—	8 (100.0)
	息子→父	1 (50.0)	1 (50.0)	—	1 (50.0)	—	—	—	—	—	2 (100.0)
	息子→母	3 (75.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	—	—	1 (25.0)	—	—	1 (25.0)	4 (100.0)
	妻→夫	9 (37.5)	5 (20.8)	3 (12.5)	—	1 (4.2)	1 (4.2)	3 (12.5)	—	5 (20.8)	24 (100.0)
	娘→父	3 (50.0)	3 (50.0)	1 (16.7)	—	—	—	1 (16.7)	—	—	6 (100.0)
	娘→母	15 (53.6)	8 (28.6)	1 (3.6)	2 (7.1)	—	—	3 (10.7)	2 (7.1)	2 (7.1)	28 (100.0)
	嫁→夫の父	10 (76.9)	2 (15.4)	—	—	—	—	2 (15.4)	—	—	13 (100.0)
	嫁→夫の母	27 (69.2)	6 (15.4)	5 (12.8)	2 (5.1)	—	1 (2.6)	—	—	3 (7.7)	39 (100.0)
	姉↔妹	—	—	1 (50.0)	—	—	—	—	—	1 (50.0)	2 (100.0)
	計	72 (57.1)	29 (23.0)	15 (11.9)	5 (4.0)	2 (1.6)	3 (2.4)	12 (9.5)	4 (3.2)	12 (9.5)	126 (100.0)

表10　世帯員数（老人を含む）

世帯員数	世帯実数	%
1　人	5	3.6
2　人	29	20.9
3　人	27	19.4
4　人	31	22.3
5　人	26	18.7
6　人	13	9.4
7　人	7	5.0
8　人	1	0.7
計	139	100.0

平均世帯規模　3.83人

は3.8人である。

介護者と老人の続柄別に世帯員数をクロスしてみると，**表11**のようになるが，２人世帯は，夫婦間介護，娘による実親の介護に多く，介護者の病気，即，介護不能の危機に陥る危険性をもつ家族であり，ショートステイのニードの高い世帯である。老人の家族形態の動向が夫婦のみ世帯の急増傾向にあることを思えば，将来のショートステイのニードは益々高まることが推測されるのである。

以上のような家族関係にある介護者が老人の世話についてどのように考えているであろうか。以下は老人介護者の世話に対する意欲の分析である。

表12は，介護者の老人の世話に対する率直な気持ちを問うた結果である。14%のものが介護に意欲をもっており，64%が，自分が世話をするしかないと，介護役割を認識している。14%のものが，「できるものなら世話をしたくない」との選択肢に○を付している。**表13**は，介護者と老人の続柄別介護意欲のクロス集計である。老夫，老妻ともに，約３分の１が「世話をしたい」としており，夫婦間介護の介護意欲は高い。また，息子，娘によ

表11　介護者と老人の続柄別世帯員数

	介護者→老人	世帯員数 1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	計
介護者と老人の続柄	夫→妻	—	6 (66.7)	—	1 (11.1)	1 (11.1)	1 (11.1)	—	—	9 (100.0)
	息子→父	—	—	1 (33.3)	1 (33.3)	—	1 (33.3)	—	—	3 (100.0)
	息子→母	1 (25.0)	—	1 (25.0)	2 (50.0)	—	—	—	—	4 (100.0)
	妻→夫	—	13 (52.0)	2 (8.0)	6 (24.0)	1 (4.0)	3 (12.0)	—	—	25 (100.0)
	娘→父	1 (14.3)	2 (28.6)	—	3 (42.9)	1 (14.3)	—	—	—	7 (100.0)
	娘→母	1 (3.6)	5 (17.9)	7 (25.0)	4 (14.3)	7 (25.0)	3 (10.7)	1 (3.6)	—	28 (100.0)
	嫁→夫の父	—	—	4 (30.8)	—	6 (46.2)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	13 (100.0)
	嫁→夫の母	1 (2.5)	2 (5.0)	7 (17.5)	12 (30.0)	9 (22.5)	4 (10.0)	5 (12.5)	—	40 (100.0)
	姉↔妹	—	1 (50.0)	1 (50.0)	—	—	—	—	—	1 (100.0)
	計	4 (3.1)	29 (22.1)	23 (17.6)	29 (22.1)	25 (19.1)	13 (9.9)	7 (5.3)	1 (0.8)	131 (100.0)

表12　老人の世話に対する介護者の意欲
（おとしよりのお世話について，あなたは率直にいってどのような気持ちをお持ちですか。）

	人数	%
世話をしたい	20	14.4
自分が世話するしかない	89	64.0
できるものなら世話をしたくない	20	14.4
その他	6	4.3
無回答	4	2.9
計	139	100.0

る実親を介護する続柄では，「世話をしたい」とするものの割合が多く，嫁による夫の親を見る義理関係とは情緒構造において異なっている。

「できるものなら世話をしたくない」というものは，続柄によらず，女性介護者では，妻が夫をみる続柄においても，娘が父を，また娘が母をみる続柄においても，嫁が夫の親をみる続柄においても，15%前後みられるのであるが，男性介護者では夫も息子もそのように答えている者はいない。

3　ショートステイ利用家族における老人と介護者の同居過程と同居年数

前節にみられたような続柄の介護者と老人の同居はいつから始まっているであろうか。

表14は，対象老人と介護者の同居過程である。生まれた時から，または，結婚後ずっと同居しているものをあわせると55%である。それに対し，途中別居や，別居から同居に入った過程のものは37%である。

表15は介護者と老人の続柄別同居過程のクロス集計である。結婚した時からずっと同居しているのは，夫婦関係にあるものの比率が高いのは当然の事ながら，嫁による介護も，夫の父に対しては54%，姑に対しては46%と高率である。結婚からずっと同居している嫁は，はじめ別居から同居に移ったものよりも，

表13　介護者と老人の続柄別介護意欲

	介護者→老人	介護意欲					
		世話をしたい	自分が世話するしかない	できるものなら世話をしたくない	その他	無回答	計
介護者と老人の続柄	夫→妻	3 (33.3)	6 (66.7)	—	—	—	9 (100.0)
	息子→父	2 (66.7)	1 (33.3)	—	—	—	3 (100.0)
	息子→母	1 (25.0)	3 (75.0)	—	—	—	4 (100.0)
	妻→夫	8 (32.0)	12 (48.0)	4 (16.0)	—	1 4.0	25 (100.0)
	娘→父	2 (28.6)	3 (42.9)	1 (14.3)	1 (14.3)	—	7 (100.0)
	娘→母	—	22 (78.6)	4 (14.3)	2 (7.1)	—	28 (100.0)
	嫁→夫の父	1 (7.7)	9 (69.2)	2 (15.4)	—	1 (7.7)	13 (100.0)
	嫁→夫の母	3 (7.5)	27 (67.5)	5 (12.5)	3 (7.5)	2 (5.0)	40 (100.0)
	姉↔妹	—	2 (100.0)	—	—	—	2 (100.0)
	計	20 (15.3)	85 (64.9)	16 (12.2)	6 (4.6)	4 (3.1)	131 (100.0)

在宅介護でがんばる者が多いためと考えられる。はじめ別居から同居に移ったものは介護ニードによる同居と思われるが，嫁が夫の父を介護している関係(39%)や，娘が実母を介護する関係(36%)に途中同居が多い。また，娘が実父と同居に入っているもの(29%)がそれに続いている。全体的にみて，娘による介護関係は，途中から同居に入ったものの比率が高い。

同居過程は，介護者の年齢とも関係すると考えられるので，次に，介護者の性と年齢別にみてみると**表16**のようになる。やはり，結婚からずっと同居しているものの比率は60代以上の女性に多く，はじめ別居から同居に移行したものは50代40代の中年女性と若い女性に多い。また若い女性は生まれた時からずっと同居というケースも少なくなく，未婚女性が老親介護せざるを得ない状況を推測させるものである。

表14　老人と介護者の同居過程

（あなたはおとしよりと同居しておられますか。それはいつからですか。）

		人数	%
同居している		131	94.3
(再)	生まれた時からずっと(ほとんど)同居している	(17)	(12.2)
	結婚後ずっと同居している	(59)	(42.5)
	はじめ同居していて，途中別居していたが，現在同居している	(15)	(10.8)
	はじめ別居していたがその後同居した	(36)	(25.9)
	その他	(1)	(0.7)
	無回答	(3)	(2.2)
同居していない		7	5.0
無回答		1	0.7
計		139	100.0

注：　現在本人は死亡又は入所しており「同居していない」と回答した者は，死亡前の状況に訂正した。

表15　介護者と老人の続柄別同居過程

	介護者→老人	介護者と老人の同居過程						
		同居していない	生まれた時からずっと同居	結婚からずっと同居	はじめ同居途中別居現在同居	はじめ別居その後同居	その他	計
介護者と老人の続柄	夫→妻	—	—	9 (100.0)	—	—	—	9 (100.0)
	息子→父	—	1 (50.0)	—	1 (50.0)	—	—	2 (100.0)
	息子→母	1 (25.0)	1 (25.0)	—	—	2 (50.0)	—	4 (100.0)
	妻→夫	—	—	21 (91.3)	1 (4.3)	—	1 (4.3)	23 (100.0)
	娘→父	1 (14.3)	3 (42.9)	1 (14.3)	—	2 (28.6)	—	7 (100.0)
	娘→母	1 (3.6)	12 (42.9)	1 (3.6)	4 (14.3)	10 (35.7)	—	28 (100.0)
	嫁→夫の父	—	—	7 (53.8)	1 (7.7)	5 (38.5)	—	13 (100.0)
	嫁→夫の母	3 (7.7)	—	18 (46.2)	7 (17.9)	11 (28.2)	—	39 (100.0)
	姉↔妹	—	—	1 (50.0)	1 (50.0)	—	—	2 (100.0)
	計	6 (4.7)	17 (13.4)	58 (45.7)	15 (11.8)	30 (23.6)	1 (0.8)	127 (100.0)

表17は，家族形態別にみた介護者と老人との同居過程である。結婚後ずっと老人と介護者が同居しているものは，夫婦のみ世帯の夫婦間介護が最も高率である（夫婦のみ世帯の残る2ケースは別居の嫁が介護者である）。老夫婦と未婚子が同居する家族形態でも，生まれた時から，または結婚後ずっと同居して来たものばかりである。それに比較し，はじめ別居していて現在同居している途中同居過程のものは，片親と既婚子が同居する欠損直系家族形態のものに多くあらわれている。また数は少ないが，その他の親族が介護者であるものも，はじめ別居から同居にうつった過程のものが多い。

表18は，同居過程と介護意欲の関係を示している。予想に違はず，結婚後ずっと同居しているものに「世話をしたい」という意欲が高く，はじめ別居から同居に入ったものに「できるものなら世話をしたくない」というものの相対的比率が高くなっている。はじめ同居して，途中別居し，現在同居しているものは，「自分が世話するしかない」とするものの比率が高い。

表19は，介護者と老人の同居年数の単純集計である。同居年数が30年以上に及ぶものが45%と高率であり，5年から10年の同居年数が10%である。**表20**は，介護者と老人の続柄別同居年数を示している。いづれの二者関係においても，同居年数が30年以上に及ぶものが多いことが注目される。長い同居年数が，在宅介護を頑張らせている基盤となっていることが考えられる。夫婦間の介護意欲が高いのも，長年連れ添った相棒への愛情が，全くきびしい要介護状況の中にあっても，在宅で

表16　介護者の性別年齢別老人との同居過程

		介護者と老人の同居過程						
		同居していない	生まれた時からずっと	結婚からずっと同居	はじめ同居途中別居現在同居	はじめ別居その後同居	その他	計
介護者性と年齢階層	男 50 代	1 (25.0)	1 (25.0)	—	1 (25.0)	1 (25.0)	—	4 (100.0)
	男 60 代	—	1 (25.0)	1 (25.0)	—	2 (50.0)	—	4 (100.0)
	男 70 代	1 (14.3)	—	6 (85.7)	—	—	—	7 (100.0)
	男 80 代	—	—	2 (100.0)	—	—	—	2 (100.0)
	女 20 代	—	2 (66.7)	—	—	1 (33.3)	—	3 (100.0)
	女 30 代	1 (10.0)	2 (20.0)	3 (30.0)	1 (10.0)	3 (30.0)	—	10 (100.0)
	女 40 代	2 (7.1)	5 (17.9)	8 (28.6)	3 (10.7)	10 (35.7)	—	28 (100.0)
	女 50 代	1 (2.5)	3 (7.5)	13 (32.5)	7 (17.5)	16 (40.0)	—	40 (100.0)
	女 60 代	1 (4.8)	3 (14.3)	14 (66.7)	1 (4.8)	2 (9.5)	—	21 (100.0)
	女 70 代	—	—	9 (69.2)	2 (15.4)	1 (7.7)	1 (7.7)	13 (100.0)
	女 80 代	—	—	3 (100.0)	—	—	—	3 (100.0)
	計	7 (5.2)	17 (12.6)	59 (43.7)	15 (11.1)	36 (26.7)	1 (0.7)	135 (100.0)

表17　家族形態別介護者と老人の同居過程

		介護者と老人の同居過程					
		同居していない	生まれた時から同居	結婚後ずっと同居	はじめ同居途中別居現在同居	はじめ別居その後同居	計
家族形態	単独世帯	5 (100.0)	—	—	—	—	5 (100.0)
	老夫婦のみ	2 (10.0)	—	18 (90.0)	—	—	20 (100.0)
	老夫婦と未婚子のみ	—	2 (25.0)	6 (75.0)	—	—	8 (100.0)
	老夫婦と既婚子家族同居	—	1 (6.7)	8 (53.3)	5 (33.3)	1 (6.7)	15 (100.0)
	老父又は老母のみと既婚子家族同居	—	8 (11.3)	25 (35.2)	8 (11.3)	30 (42.3)	71 (100.0)
	老父又は老母のみと未婚子同居	—	6 (66.7)	—	1 (11.1)	2 (22.2)	9 (100.0)
	その他	—	—	2 (33.3)	1 (16.7)	3 (50.0)	6 (100.0)
	計	7 (5.2)	17 (12.7)	59 (50.3)	15 (11.2)	36 (26.9)	134 (100.0)

表18　介護者と老人の同居過程別介護意欲

		介護意欲					
		世話をしたい	自分が世話するしかない	できるものなら世話をしたくない	その他	無回答	計
介護者と老人の同居過程	同居していない	2 (28.6)	2 (28.6)	2 (28.6)	1 (14.3)	—	7 (100.0)
	生まれた時からずっと同居	2 (11.8)	11 (64.7)	2 (11.8)	2 (11.8)	—	17 (100.0)
	結婚後ずっと同居	14 (23.7)	38 (64.4)	6 (10.2)	—	1 (1.7)	59 (100.0)
	はじめ同居→別居→同居	—	12 (80.0)	2 (13.3)	1 (6.7)	—	15 (100.0)
	はじめ別居→同居	1 (2.8)	24 (66.7)	7 (19.4)	2 (5.6)	2 (5.6)	36 (100.0)
	その他	—	1 (100.0)	—	—	—	1 (100.0)
	無回答	1 (25.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	—	1 (25.0)	4 (100.0)
	計	20 (14.4)	89 (64.0)	20 (14.4)	6 (4.3)	4 (2.9)	139 (100.0)

表19　介護者と老人の同居年数
(おとしよりとの同居年数は通算して何年になりますか。)

		人数	%
同居している		131	94.3
(再)	1年未満	(6)	(4.3)
	1～3年未満	(6)	(4.3)
	3～5	(7)	(5.0)
	5～10	(14)	(10.1)
	10～15	(7)	(5.0)
	15～20	(11)	(7.9)
	20～25	(7)	(5.0)
	25～30	(9)	(6.5)
	30年以上	(62)	(44.8)
	無回答	(2)	(1.4)
同居していない		7	5.0
無回答		1	0.7
計		139	100.0

介護を続けている源泉となっていることがわかる。

次いで，同居年数が30年以上にのぼるケースでは娘による介護の比率が高いが，娘が母を介護するものには5年から10年のところにも，もう一つの山がみられる。これは介護ニーズによる途中同居と考えられる。

表21は同居年数と介護意欲の関係を示している。30年以上の同居年数のものは「世話をしたい」とするものの比率が相対的に高く，5年から30年未満までのものは，「自分が世話するしかない」とするあきらめ認識型が多くなっている。介護意欲のないものは，10年から15年未満，一年未満，そして別居介護のものに比較的多く現われている。

以上，ショートステイ利用老人と介護者の家族関係など，その背景の考察を進めて来たが，次章では，そのような介護者と老人が，どのように，ショートステイサービスを利用しているか，利用にいたる迄の経過について，別居親族ネットワークも含めて力動を探っていきたい。

表20　介護者と老人の続柄別同居年数

介護者→老人		同居年数										
		同居していない	1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20～25年未満	25～30年未満	30年以上	計
介護者と老人の続柄	夫→妻	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9 (100.0)	9 (100.0)
	息子→父	—	—	2 (66.7)	—	—	—	—	—	—	1 (33.3)	3 (100.0)
	息子→母	1 (25.0)	—	—	—	1 (25.0)	1 (25.0)	—	—	—	1 (25.0)	4 (100.0)
	妻→夫	—	—	—	—	—	1 (4.3)	1 (4.3)	—	—	21 (91.3)	23 (100.0)
	娘→父	1 (14.3)	—	1 (14.3)	—	1 (14.3)	—	—	—	1 (14.3)	3 (42.9)	7 (100.0)
	娘→母	1 (3.6)	1 (3.6)	1 (3.6)	2 (7.1)	5 (17.9)	1 (3.6)	2 (7.1)	1 (3.6)	2 (7.1)	12 (42.9)	28 (100.0)
	嫁→夫の父	—	1 (7.7)	—	2 (15.4)	1 (7.7)	—	4 (30.8)	1 (7.7)	2 (15.4)	2 (15.4)	13 (100.0)
	嫁→夫の母	3 (7.7)	2 (5.1)	1 (2.6)	3 (7.7)	6 (15.4)	4 (10.3)	3 (7.7)	5 (12.8)	3 (7.7)	9 (23.1)	39 (100.0)
	姉↔妹	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2 (100.0)	2 (100.0)
	計	6 (4.7)	4 (3.1)	5 (3.9)	7 (5.5)	14 (10.9)	7 (5.5)	10 (7.8)	7 (5.5)	8 (6.3)	60 (46.9)	128 (100.0)

表21　同居年数別介護意欲

		介護意欲					
		世話をしたい	自分が世話するしかない	できるものなら世話したくない	その他	無回答	計
同居年数	同居していない	2 (28.6)	2 (28.6)	2 (28.6)	1 (14.3)	—	7 (100.0)
	1年未満	—	3 (50.0)	3 (50.0)	—	—	6 (100.0)
	1～3年未満	2 (33.3)	3 (50.0)	1 (16.7)	—	—	6 (100.0)
	3～5年未満	—	4 (57.1)	1 (14.3)	1 (14.3)	1 (14.3)	7 (100.0)
	5～10年未満	1 (7.1)	12 (85.7)	—	1 (7.1)	—	14 (100.0)
	10～15年未満	—	5 (71.4)	2 (28.6)	—	—	7 (100.0)
	15～20年未満	2 (18.2)	8 (72.7)	—	—	1 (9.1)	11 (100.0)
	20～25年未満	—	6 (85.7)	1 (14.3)	—	—	7 (100.0)
	25～30年未満	1 (11.1)	7 (77.8)	1 (11.1)	—	—	9 (100.0)
	30年以上	12 (19.4)	38 (61.3)	8 (12.9)	3 (4.8)	1 (1.6)	62 (100.0)
	無回答	—	1 (33.3)	1 (33.3)	—	1 (33.3)	3 (100.0)
	計	20 (14.4)	89 (64.0)	20 (14.4)	6 (4.3)	4 (2.9)	139 (100.0)

Ⅱ　ショートステイを利用する前の状況，利用に至るまでの過程

1　ショートステイを何で知ったか

調査対象介護者が如何なる情報源によってショートステイサービスのことを知ったかを示した単純集計は**表22**であり，家族形態別に示したのが**表23**である。

全体として最も多い情報源は，市役所の老人福祉課あるいは，福祉事務所で聞いて利用を始めたものであり，45%である。次に，ショートステイ先のホームの人から聞いたものが17%，保健婦または訪問看護婦から聞いたものが11%とつづいている。家族形態別に情報源を分析すると，市役所からの情報によるものが多いのは単独世帯と未婚子と同居する

表22　ショートステイサービスについての情報源
（ショートステイ・サービスのことを何で知りましたか。2回以上利用した場合は，はじめて利用した時のことについてお答え下さい。）

	人　数	%
ショートステイをうけた施設の人から聞いた	24	17.3
保健婦又は訪問看護婦の方から聞いた	15	10.8
ヘルパー（家庭奉仕員）から聞いた	0	0.0
かかりつけの医者から聞いた	4	2.9
市役所の老人福祉課あるいは福祉事務所で聞いた	62	44.6
民生委員から聞いた	4	2.9
市の広報紙で知った	10	7.2
テレビやラジオで知った	1	0.7
近所の人や友人知人から聞いた	12	8.6
そ　の　他	5	3.6
無　回　答	2	1.4
計	139	100.0

表23　家族形態別ショートステイサービスを知った情報源

		情報源									
		ショートステイ利用施設の人から	保健婦又は訪問看護婦から	かかりつけの医者から	市役所の老人福祉課から	民生委員から	市の広報により	テレビラジオにより	近所の人や友人知人から	その他	計
家族形態	単独世帯	1 (20.0)	—	—	4 (80.0)	—	—	—	—	—	5 (100.0)
	老夫婦のみ	5 (23.8)	4 (19.0)	2 (4.8)	5 (23.8)	1 (4.8)	1 (4.8)	1 (4.8)	2 (9.5)	—	21 (100.0)
	老夫婦と未婚子のみ	3 (37.5)	—	—	5 (62.5)	—	—	—	—	—	8 (100.0)
	老夫婦と既婚子家族同居	2 (11.8)	2 (11.8)	1 (5.9)	10 (58.8)	—	—	—	1 (5.9)	1 (5.9)	17 (100.0)
	老父又は老母のみと既婚子家族同居	10 (13.9)	8 (11.1)	1 (1.4)	33 (45.8)	2 (2.8)	8 (11.1)	—	7 (9.7)	3 (4.2)	72 (100.0)
	老父又は老母のみと未婚子同居	3 (33.3)	1 (11.1)	—	3 (33.3)	1 (11.1)	—	—	—	1 (11.1)	9 (100.0)
	その他	—	—	—	2 (40.0)	—	1 (20.0)	—	2 (40.0)	—	5 (100.0)
	計	24 (17.5)	15 (10.9)	4 (2.9)	62 (45.3)	4 (2.9)	10 (7.3)	1 (0.7)	12 (8.8)	5 (3.0)	137 (100.0)

核家族世帯である。夫婦のみ世帯は種々の情報源により利用している。夫婦のみの世帯では高齢者間介護の共倒れ寸前の状況に対し，訪問看護の保健婦や，かかりつけの医者，近隣の知人友人，民生委員からショートステイのことを聞いている。

表24　ショートステイサービスの利用を積極的にすゝめた人

（ショートステイ・サービスの利用を積極的にすゝめたのは，主たる介護者であるあなた自身ですか，それとも他の人ですか。その方はおとしよりとどのような続柄ですか。）

	人数	%
介護者自身	85	61.2
他の人	52	37.4
妻	(1)	(0.7)
夫	(5)	(3.6)
娘	(7)	(5.0)
息子	(21)	(15.1)
嫁	(3)	(2.2)
（再）孫	(0)	(0.0)
きょうだい	(1)	(0.7)
姪甥	(0)	(0.0)
友人	(1)	(0.7)
その他	(13)	(9.4)
無回答	2	1.4
計	139	100.0

2　ショートステイの利用を積極的にすすめた人は誰か

表24は，「ショートステイの利用を積極的にすすめた人」の老人との続柄の単純集計，**表25**はその家族形態別クロス集計である。

全体として，ショートステイ利用を積極的にすすめているのは介護者自身(63%)であり，介護者以外では老人の息子(15%)が多い。介護者自身がショートステイ利用をすすめたケースの比率が最も低いのは，両親揃いの三世代家族である点が注目される。この場合，介護者以外のいろいろの続柄のもののすすめで利用しているが，老人の娘によるすすめが中でも多いといえる。三世代世帯の意志決定の難しさが推察されるのである。欠損三世代世帯では老人の息子が積極的な推進者となって

表25　家族形態別積極的にショートステイ利用をすゝめた人

		ショートステイ利用をすゝめた人									
		介護者自身	老人の妻	老人の夫	老人の娘	老人の息子	老人の嫁	老人のきょうだい	老人の友人	その他	計
家族形態	単独世帯	2 (40.0)	—	—	—	2 (40.0)	—	1 (20.0)	—	—	5 (100.0)
	老夫婦のみ	15 (71.4)	—	1 (4.8)	1 (4.8)	2 (9.5)	1 (4.8)	—	—	1 (4.8)	21 (100.0)
	老夫婦と未婚子のみ	5 (71.4)	—	—	1 (14.3)	—	—	—	—	1 (14.3)	7 (100.0)
	老夫婦と既婚子家族同居	6 (37.5)	1 (6.3)	2 (12.5)	3 (18.8)	2 (12.5)	1 (6.3)	—	—	1 (6.3)	16 (100.0)
	老父又は老母のみと既婚子家族同居	47 (65.3)	—	2 (2.8)	2 (2.8)	14 (19.4)	—	—	—	7 (9.7)	72 (100.0)
	老父又は老母のみと未婚子同居	7 (77.8)	—	—	—	—	—	—	—	2 (22.2)	9 (100.0)
	その他	3 (50.0)	—	—	—	1 (16.7)	1 (16.7)	—	1 (16.7)	—	6 (100.0)
	計	85 (62.5)	1 (0.7)	5 (3.7)	7 (5.1)	21 (15.4)	3 (2.2)	1 (0.7)	1 (0.7)	12 (8.8)	136 (100.0)

表26　介護者と老人の続柄別ショートステイサービス利用を積極的にすゝめた人

	介護者 → 老人	ショートステイサービス利用を積極的にすゝめた人							
		介護者自身	老人の妻	老人の夫	老人の娘	老人の息子	嫁	その他	計
介護者と老人の続柄	夫 → 妻	6 (66.7)	—	—	1 (11.1)	—	1 (11.1)	1 (11.1)	9 (100.0)
	息子 → 父	2 (66.7)	—	—	1 (33.3)	—	—	—	3 (100.0)
	息子 → 母	4 (100.0)	—	—	—	—	—	—	4 (100.0)
	妻 → 夫	15 (65.2)	—	—	3 (13.0)	3 (13.0)	1 (4.3)	1 (4.3)	23 (100.0)
	娘 → 父	6 (85.7)	—	—	—	—	—	1 (14.3)	7 (100.0)
	娘 → 母	24 (85.7)	—	1 (3.6)	—	1 (3.6)	—	2 (7.1)	28 (100.0)
	嫁 → 夫の父	15 (38.5)	1 (7.7)	1 (7.7)	—	4 (30.8)	—	2 (15.4)	13 (100.0)
	嫁 → 夫の母	19 (47.5)	—	3 (7.5)	—	12 (30.0)	—	6 (15.0)	40 (100.0)
	きょうだい	2 (100.0)	—	—	—	—	—	—	2 (100.0)
	計	81 62.8	1 (0.8)	5 (3.9)	5 (5.4)	20 (15.5)	2 (1.6)	13 (10.1)	129 (100.0)

いる。単独世帯の老人に対しても老人の息子がすすめているものが多い。

介護者自身がその世帯の中でどういう位座にあるかを調べるために，介護者と老人の続柄別に利用を積極的にすすめた人をクロス集計した（**表26**）。

介護者自身がショートステイ利用を積極的にすすめたものの比率が最も高いのが，娘が実父を介護するものと，娘が実母を介護する場合であり，共に86%という高率である。それに対し，嫁が夫の父を介護している続柄の介護者は，自分でショートステイ利用をすすめているのは39%にとどまり，老人の息子，即ち，介護者の夫が積極的に利用をすすめているものが31%，その他老人の夫や老人の妻などがすすめており，嫁には決定権がない場合が多いことが浮き彫りとなっている。同様の傾向は嫁が夫の母を介護する関係にもみられ，娘が実親を介護する場合と，嫁が配偶者の親を介護する場合とでは，社会サービスの利用に至る過程が非常に異なることに注意すべきである。また，夫が妻を介護しており，妻が夫を介護している夫婦間の介護においても，別居の娘や息子がショートステイ利用をすすめている。介護者は自分であると回答した息子の場合は，すべて自分自身でショートステイの利用を決定している。

在宅ケアの社会サービス利用過程には，このような家族，親族間における力関係や，社会サービス利用に対する価値意識の規制が大きく働くことに留意すべきである。嫁が，あるいは老いた妻や夫が，介護の限界を越えていても，社会サービス利用に対する偏見が地域の意識に根強かったり，夫のきょうだい等

の親族からの圧力がある時，ショートステイ利用のニードは潜在していまうのであり，ショートステイ利用者の利用回数や頻度のみでは地域の真のニードを測定し得ないといえよう。

3　ショートステイの利用に対する別居親族の反対があったか

表27は，ショートスティサービス利用に対する別居親族の反対の有無についての単純集計である。139人の介護者のうち81%は反対する人はないかったとしている。しかし，反対があったが説得して預けたものが5名，反対すると思われたので知らせずに預けたものが3名というように，すべてがスムーズに進んでいるわけではない。他方，介護者の方がためらっていたが，むしろ他の親族のすすめで利用したものが10名である。それを，介護者と老人の続柄別にクロス集計したのが**表28**である。反対する別居親族がいなかったものは，介護者が男性，即ち夫か息子であるもの

表27　ショートステイ・サービス利用に対する別居親族の反対

（ショートステイ・サービスを利用するについて別居親族の反対がありましたか。）

	人　数	%
反対があったが説得した	5	3.6
反対すると思われたので知らせずに預けた	3	2.2
反対する人はいなかった	112	80.5
介護者はためらっていたが，むしろ他の親族が利用をすすめた	10	7.2
そ　の　他	3	2.2
無　回　答	6	4.3
計	139	100.0

表28　介護者と老人の続柄別別居親族の反対

	介護者→老　人	別居親族の反対					
		反対があったが説得した	反対すると思われたので知らせず預けた	反対する人はいなかった	介護者はためらったがむしろ他の親族がすすめた	そ　の　他	計
介護者と老人の続柄	夫　→　妻	—	—	8 (100.0)	—	—	8 (100.0)
	息子　→　父	—	—	2 (100.0)	—	—	2 (100.0)
	息子　→　母	—	—	3 (75.0)	—	1 (25.0)	4 (100.0)
	妻　→　夫	1 (4.2)	—	22 (91.7)	1 (4.2)	—	24 (100.0)
	娘　→　父	—	—	5 (71.4)	2 (28.6)	—	7 (100.0)
	娘　→　母	1 (3.7)	—	24 (88.9)	2 (7.4)	—	27 (100.0)
	嫁　→夫の父	1 (7.7)	—	10 (76.9)	2 (15.4)	—	13 (100.0)
	嫁　→夫の母	2 (5.1)	3 (7.7)	32 (82.1)	1 (2.6)	1 (2.6)	39 (100.0)
	姉　↔　妹	—	—	2 (100.0)	—	—	2 (100.0)
	計	5 (4.0)	3 (2.4)	108 (85.7)	8 (6.3)	2 (1.6)	126 (100.0)

であつた。娘が介護者である場合は，娘はためらい他親族のすすめで利用したものの比率が比較的高いが，それを含めると別居親族の反対は殆どない。それに対して嫁が介護する場合，介護者自身がためらったが他親族のすすめにより利用したもの３ケース，他方，反対すると思われるので他親族に知らせず預けたもの３ケース，反対があったが説得して預けたもの３ケースと他の続柄より比較的多様な分散をみせている。夫婦間介護，姉妹間介護，娘の介護に比べ，やはり嫁による介護のものが社会サービスを利用するに際して，別居親族からの規制があることをうかがわせる。

本調査は，ショートステイ利用に至ったケースについての分析であり，社会サービスの利用に至らぬケースの中には，嫁介護における別居親族の反対などが多いことが推測される。

4　ショートスティを利用する前，老人はどのように受けとめていたか

ショートステイサービスは，在宅介護の家族介護者に対する援助を目的とする施策であるが，介護をうけている老人自身は社会サービス利用に対してどのように受けとめていたであろうか。老人福祉サービスが，老人の福祉を大前提とする以上，老人本人のために，このサービスが効果を示すものかどうかを無視することはできない。老人自身の心理についての単純集計は**表29**に示される。まず，老人自からが積極的にショートステイを利用したいという気持をもつていたものは12名，９％のみである。家族が説明してからは自分で納得して利用したものが最も多く，45名33％であった。しかし，家族が説得してやっとサービスを受けることになったもの13名，本人にはほんとのことを言わずにつれていったもの７名，合せて16％のものの抵抗は強かったと考えられる。そのほか，ショートステイ・サービスのことをよく理解していなかったがあまり抵抗もしなかったものが27名，本人がどう思っていたかはわからなかったものが５名，合せて24％にのぼっていることは，介護される受身の老人にとって自分の意見を主張することの難かしさ，また超高齢の老人における痴呆状況なども推察される。この項目についても，老人のうけとめ方に対する，介護者の回答であり，老人自身の意志，人権をどうとらえるかは，社会福祉サービスを受ける家族，親族ネットワークにとっての難かしい課題である。

表30は，介護者と老人の続柄別に，老人自

表29　ショートステイ利用前の老人のうけとめ
（ショートステイ・サービスを利用する前，おとしよりはショートステイを利用することをどのように受けとめていましたか。）

	人　数	%
自分から積極的に利用したいという気持をもっていた	12	8.6
家族が説明してからは自分で納得して利用した	45	32.5
家族が説得してやっとサービスをうけることになった	13	9.4
本人にはほんとのことを言わずにつれていった	7	5.0
ショートステイ・サービスのことをよく理解していなかったがあまり抵抗しなかった	27	19.4
本人がどう思っていたかはわからない	28	20.1
そ　の　他	5	3.6
無　回　答	2	1.4
計	139	100.0

表30　介護者と老人の続柄別ショート利用前の老人の受けとめ

		ショートステイ利用前の老人の受けとめ							
		自分から積極的に利用したい	家族が説明してからは納得して利用した	家族が説得してやっと利用した	本人にほんとのことをいわれずにつれていった	ショートステイのことをよく理解していなかったが抵抗しなかった	本人がどう思っていたかわからない	その他	計
介護者と老人の続柄	夫 → 妻	—	1 (12.5)	1 (12.5)	—	3 (37.5)	3 (37.5)	—	8 (100.0)
	息子 → 父	—	2 (66.7)	—	1 (33.3)	—	—	—	3 (100.0)
	息子 → 母	—	3 (75.0)	—	—	—	1 (25.0)	—	4 (100.0)
	妻 → 夫	3 (12.5)	8 (33.3)	5 (20.8)	1 (4.2)	1 (4.2)	5 (20.8)	1 (4.2)	24 (100.0)
	娘 → 父	—	2 (28.6)	1 (14.3)	1 (14.3)	2 (28.6)	1 (14.3)	—	7 (100.0)
	娘 → 母	2 (7.1)	11 (39.3)	—	2 (7.1)	5 (17.9)	5 (17.9)	3 (10.7)	28 (100.0)
	嫁 → 夫の父	2 (15.4)	5 (38.5)	2 (15.4)	—	2 (15.4)	2 (15.4)	—	13 (100.0)
	嫁 → 夫の母	3 (7.5)	8 (20.0)	4 (10.0)	2 (5.0)	13 (32.5)	10 (25.0)	—	40 (100.0)
	きょうだい	—	2 (100.0)	—	—	—	—	—	2 (100.0)
	計	10 (7.8)	42 (32.6)	13 (10.1)	7 (5.4)	26 (20.2)	27 (20.9)	4 (3.1)	129 (100.0)

身のうけとめ方をクロス集計したものである。

家族が説得してやっと利用したケースは，妻に介護される夫5ケース(21%)や嫁や娘に介護される父親であり，男性の抵抗が大きいことがわかる。それに対し，ショートステイをよく理解せぬまま抵抗もせず利用している老人は，夫に介護される妻3ケース(38%)，嫁に介護されるしゅうとめ13ケース(33%)というように，女性老人が多い傾向を示している。

5　ショートスティ利用経験

本調査時におけるショートステイがはじめてのものは48%，約半分である(**表31**)。その施設において以前にもショートステイを利用したことがあるものは38%，当該施設は初めてだが，他のホームのショートステイを利用したことがあるものは14%である。本調査は，比較的，ショートステイの利用経験が多いものが対象となっているといえるかもしれない。

表31　ショートステイサービスの利用経験
（おとしよりがショートステイを利用されたのは，一度だけですか。）

	人数	%
一度だけ	66	47.5
この施設のショートステイは一度だけだが，他のを利用したことがある	20	14.4
前にもこの施設のショートステイを利用したことがある	53	38.1
無回答	0	0.0
計	139	100.0

その利用経験を介護者と老人の続柄別にみ

表32　介護者と老人の続柄別ショートステイの利用経験

		ショートステイ利用経験							
		一度だけ		前にも利用経験あり				計	
				他の施設		この施設			
介護者↓老人	夫 → 妻	5	(55.6)			4	(44.4)	9	(100.0)
	息子 → 父	1	(33.3)			2	(66.7)	3	(100.0)
	息子 → 母	2	(50.0)			2	(50.0)	4	(100.0)
	妻 → 夫	13	(52.0)	3	(12.0)	9	(36.0)	25	(100.0)
	娘 → 父	4	(57.1)	1	(14.3)	2	(28.6)	7	(100.0)
	娘 → 母	10	(35.7)	5	(17.9)	13	(46.4)	28	(100.0)
	嫁 → 夫の父	8	(61.5)			5	(38.5)	13	(100.0)
	嫁 → 夫の母	18	(45.0)	8	(20.0)	14	(35.0)	40	(100.0)
	姉 ↔ 妹	2	(100.0)					2	(100.0)
	計	63	(48.1)	17	(13.0)	51	(38.9)	131	(100.0)

てみると，**表32**の通りである。

息子が父を，娘が母を，嫁が夫の母をみている関係では，今回がはじめてのショートステイ利用であるものより，前にも利用したことがあるものの方が多い。一度利用すると再度利用することが多い関係といえよう。その他の関係では，今回がはじめての利用であるものが過半数である。ことに，姉妹関係にあるものや，嫁が夫の父をみている場合，初めての利用の比率が高い。

6　ショートステイ利用前老人はその施設をどの程度知っていたか

表33は今回のショートスティ先の施設を事前に老人が知っていたか否かを示している。以前にその施設を「全く知らなかったもの」は41%である。他方「その施設の他のサービス（デイ・サービスや入浴サービスなど）を利用したことがあるもの」が35%，「前にもその施設のショートステイを利用したことがあるもの」12%，「行ったことがあるもの」が3%であり，これらをあわせた49%にも昇るものが，ショートステイ利用前に，その施設に足を運んでいる。調査対象の施設が日頃からデイ・サービスなどの在宅サービスに取り組んでおり，老人や介護者と，施設とのコミュニケーションのある中でのショートステイであることをこの調査対象の背景としてふまえておく必要がある。

表33　老人のショートステイ施設に対する認知度
（おとしよりはショートステイを利用する前，利用施設をどの程度知っていましたか。）

	人数	%
前にもその施設のショートステイ・サービスを利用したことがある	16	11.5
その施設の他のサービス（デイサービス，入浴など）を利用したことがある	48	34.5
その施設に行ったことがある	4	2.9
その施設について聞いてはいたが，行ったことはない	12	8.6
全く知らなかった	57	41.1
無回答	2	1.4
計	139	100.0

7 ショートステイの利用理由

ショートステイサービスを利用した理由は，**表34**にみるとおり，「介護者の病気，疲労のため」が最も多く44%を占めている。次いで「介護者の冠婚葬祭参列のため」が20%，「家族の外出，旅行のため」が12%，「他の家族の病気，出産のため」が10%である。

表34 ショートステイサービスの利用理由
（ショートステイ・サービスを利用した理由は何ですか。主なものを1つだけ選んで下さい。）

	人数	%
介護者の病気，疲労のため	61	44.0
他の家族の病気，出産のため	14	10.1
介護者が冠婚葬祭に参列のため	28	20.1
家族の外出，旅行のため	17	12.2
家事，仕事が多忙のため	3	2.2
入浴サービスを利用したいため	0	0.0
機能回復訓練のため	1	0.7
老人の気分転換や孤独解消のため	2	1.4
その他	12	8.6
無回答	1	0.7
計	139	100.0

表35は利用理由の家族形態別クロス集計である。介護者の病気，疲労のためというショートステイ本来の利用理由をあげるものの割合が最も高いのは，「老夫婦のみ世帯」である。いわゆる三世代同居では，「介護者が冠婚葬祭に出席する」など，他の親族や他の家族メンバーとのかかわりでショートステイを利用している点が，夫婦のみ世帯と異なるところである。とりわけ，無配偶の老人と既婚子家族が同居する欠損三世代家族では，家族の外出，旅行の為の利用理由が高率となっている。利用ニードが家族の関係的役割から生まれるが故に，利用理由と家族形態の関係は強い。

表35 家族形態別ショートステイ利用理由

		ショートステイ利用理由								
		介護者の病気，疲労の為	他の家族の病気出産の為	介護者が冠婚葬祭に参列のため	家族の外出，旅行の為	家事，仕事が多忙のため	機能回復訓練のため	老人の気分転換や孤独解消のため	その他	計
家族形態	単独世帯	2 (40.0)	2 (40.0)	—	—	1 (20.0)	—	—	—	5 (100.0)
	老夫婦のみ	14 (66.7)	—	3 (14.3)	1 (4.8)	—	—	—	3 (14.3)	21 (100.0)
	老夫婦と未婚子のみ	4 (57.1)	—	2 (28.6)	1 (14.3)	—	—	—		7 (100.0)
	老夫婦と既婚子家族同居	7 (41.2)	—	4 (23.5)	1 (5.9)	—	1 (5.9)	—	4 (23.5)	17 (100.0)
	老父又は老母のみと既婚子家族同居	28 (38.9)	11 (15.3)	16 (22.2)	12 (16.7)	2 (2.8)	—	—	3 (4.2)	72 (100.0)
	老父又は老母のみと未婚子同居	4 (44.4)	1 (11.1)	1 (11.1)	1 (11.1)	—	—	2 (22.2)	—	9 100.0)
	その他	2 (33.3)	—	2 (33.3)	1 (16.7)	—	—	—	1 (16.7)	6 (100.0)
	計	61 (44.5)	14 (10.2)	28 (20.4)	17 (12.4)	3 (2.2)	1 (0.7)	2 (1.5)	11 (8.0)	137 (100.0)

おわりに

近年多くなっている寝たきり老人の介護についての調査における家族分析は，「介護者が誰であるのか」に留まっているものが多い。

しかし，老人介護は，老人の加齢と，同時に介護者の加齢を伴ない，さらには，家族成員全員のエイジングの過程の中で行われる介護行動であり，老人と介護者の二者関係の背景はまことに多様である。しかも，それは，日夜，老人をめぐる家族親族ネットワークの心情がおりなす力動として現われるのである。

ショートステイサービス制度は，在宅介護の大変さの認識の上に，家族の介護負担の減少，介護者への援助を目指して実施され，それなりの効果をあげつつある。しかし，多様な在宅介護家族のありようの中に，どのように社会サービスが受容され，家庭介護の中にどのように組み込まれていくのか，ショートステイ利用過程における老人の家族親族ネットワークの力動を多角的に検討し，利用の普及を配慮するところまでには至っていない。

本稿では，ショートステイを利用した老人と介護者の背景をできるかぎり多角的に分析し，老人介護における社会サービスの導入が，老人と介護者をとりまく親族ネットワークの力動の中で，いかに受け入れられていくかの過程を考察した。

そこに見られた新しい動向は次の三点にまとめられよう。

まず，在宅介護の老人介護関係において，世代間介護よりも夫婦間介護の関係への傾斜がみられたことである。

夫婦のみ世帯のみならず，既婚子と同居する三世代世帯においても，老人が有配偶である限り，介護は夫婦間介護が中心となっている場合に多い。生活の世代分離の進行は，介護の世代分離の傾向を推進している。高齢な夫が高齢の妻を介護する関係も9ケース(7%)見出された。

第二は，在宅介護の老人と介護者の同居年数が長いことであり，ショートステイ利用介護者の45%が30年以上の同居継続者である。また「結婚時よりずっと同居しているもの」が最も多く（59ケース，42%），「はじめ別居から同居にうつったもの」がそれに次いでいるが，前者の半数である（30ケース，22%）。今後も老人の「世話をしたい」とする。介護意欲の高い20ケースのうち，同居年数が30年以上にのぼるものが6割，「結婚後ずつと同居」という同居過程のものが7割に昇っている。

介護意欲は，同居関係以外の多くの要因にも規定されることはいうまでもないが，要介護老人の世話というきびしい環境に耐える最大の要因は，老人に対する愛情であり，その人間愛は，長い期間共に生活して来た愛と葛藤のおりなす同居年月の実績から生まれるといえよう。夫婦関係のみならず，嫁と舅姑関係であっても，結婚当初からずっと同居して

来た間柄においては，長い同居年数が他に替え難い人間関係を生み出し，「世話をしたい」または「自分が世話をするしかない」という在宅介護に耐える役割認識となっていることが考えられる。

しかし，現在の日本の家族の動向は，出生子供数の減少による長男長女時代を迎え，寿命の延びとも俟って，結婚当初から夫の親の家族と同居するものは少なくなっている。近年60歳以上の老人を含む世帯において，年々夫婦のみ世帯，単独世帯が増加し，三世代世帯の割合が減少していることは，国の統計からも明からである。従って今後，在宅介護意欲の高い老人介護は，夫婦間の高齢者間介護であるケースの比重が増すものと考えられる。夫婦間介護は「世話をしたい」という情緒的意欲は高くとも，体力的限界の問題が大きい。共倒れにならぬために，要介護老人のみならず老齢介護者も健康保持できるよう，ショートステイ利用を，遠慮することなくニードに応じて，定期的に利用できるようになることが望まれるであろう。

第三には，女性老人についていえば，調査対象となったショートステイ利用老人の62%(86名)が女性である。しかし有配偶の女性は16名に過ぎず，そのうち9名が高齢な夫に介護され，3名が娘に，4名が嫁に介護されている。それに対し無配偶女性は78%(67名)であり，そのうち嫁に介護されているもの36名，娘に介護されているもの25名，息子に介護されているもの4名，姉妹間介護2名である。嘗て家制度の時代の，夫は妻に看取られ，妻は嫁に看取られるという伝統的日本の介護パターンは，ショートステイ利用老人と介護者の関係において見る限り，変化をみせている。但しこの傾向には，嫁が介護する場合，社会サービス導入がすすめにくいという事情を反映していることも考えられる。すなわち，「嫁は夫の親を介護するもの」という意識が地域や親族ネットワークに根強くある時，社会サービス利用に関し嫁に意志決定権がなく，別居親族の反対により，社会サービス利用のニードは潜在化していることが推測されるのである。それに対し，娘，息子が実父母を介護している場合はストレートにショートステイ利用への意志決定がなされる傾向がある。

なお，社会サービス利用の意志決定は，老人の息子によってすすめられている場合が多い。日常の世話は嫁が行っていても，老人の息子である夫が介護状態の現実をしっかり理解しているとき，ショートステイ利用により介護者の心身の疲労が回復しているケースも多く，老人介護における夫の役割の重要なことが考察された。

また，無配偶の親と同居する三世代家族においては，ショートステイ利用理由が，「冠婚葬祭に参列のため」，「家族の外出，旅行のため」という，他親族との関係的役割によるものが比較的多くなっており(39%)，「介護者の病気，疲労のため」という理由と並んでいる。それとは対照的に老夫婦のみ世帯においては，「介護者の病気疲労のため」が67%に昇る。老人介護における老人と介護者の二者関係は，家族形態により大きく異なり，他の成員との力動により左右されることがわかる。

介護調査といわれる多くのものが，健常者に対して「もしも，自分が将来寝たきりになったとき誰にみてもらいたいか」という願望意識調査である。一方的な願望は絵に画いた餅になる可能性が多く，実態に結びつかぬことが多い。しかし今回の調査は，対象数が少なく変数間の相関をみるには充分の数といえないかもれしないけれども，家族力動の視点から介護関係の実態をとらえる手がかりとしての重みをもっている。